

[研究ノート]

保育現場における保育士の「気づき」・「気がかり」 —保育士の語りから考える—

横山 順一

YOKOYAMA Junichi

高木 健志

TAKAKI Takeshi

要約：現代社会において、生活問題を抱えていても他者に助けを求めることが困難な親に対する支援のあり方は、非常に大きな問題である。そうした中、親が示す困難性を認知する可能性が高い保育場面において、何らかの問題を抱える親が日常生活の中で示す何らかのシグナルに対して保育者が感じる「気づき」や「気がかり」については、これまで十分な検討がなされていない。

そこで本稿では、保育所の保育士の相談場面ではない日常的な親とのかかわりの中で、どのような「気づき」や「気がかり」を感じているのか、といった実態の一端を明らかにすることを目的として、保育士3名にインタビュー調査を行った。

キーワード：保育者、気づき、気がかり

I はじめに

今日、わが国では、子育て支援の重要性が声高に叫ばれる一方で、児童虐待や養育放棄、貧困などの子育て家庭における養育問題はいまだ後を絶たず、むしろ深刻化している。

こうした現状に対して、児童家庭福祉施策においては、近年、子ども・子育て支援新制度をはじめ、多様な支援体制が整備されている。しかし、それら支援の多くは、福祉サービスを当事者のニーズに合わせて提供するといったものや、自ら相談機関に支援を求めて足を運ぶ当事者たちへの相談に対応するといったいわば支援する側が受け身の体制のものが中心である。そもそも、わが国の福祉施策は申請主義を原則としており、その基本的な姿勢は今日に至るまで大きな変化はない。

しかし、当事者のニーズや求めに応じて福祉サービスを当事者に提供するだけでは、今日の子ども・家庭を取り巻く問題の解決は難しい。養育困難などの問題は家庭内で発生するため、家族以

外の第三者がその状況に早期に気がつくことは難しく、問題が深刻化する前の適切な介入は困難であることが多い。整備される様々な子育て支援施策においても、その多くは、当事者からの援助の求めに応じた相談支援を前提につくられていることから、生活問題を抱えていても他者に助けを求めることがほとんどない親に対して、どのように支援の手を差し伸べればよいのか、といった点については、現代社会において、養育者支援の大きな課題の一つであると考えられる。

こうした現状をふまえると、何らかの問題を抱える家庭へ支援の手立てを講じるにあたっては、親が日常生活の中で示すシグナルを支援者ができるだけ早く察知することが、深刻な状態になる前に問題に対応するためには重要である。子育て家庭への支援のあり方は、こうした視点から問いなおされなければならないのではないだろうか。

そこで本研究では、子どもを養育する家庭を支援する中心的な場であり、かつ、親が示す困難性が

第三者に認知される可能性の高い場であると考えられる保育現場に着目し、子どもを養育する家庭を支援する中心的存在である保育者が、相談場面ではない日常的な親とのかかわりの中で、どのような「気づき」や「気がかり」を感じているのか、ということをも明らかにすることを目的とした。

II 研究の背景

(1) 「気づき」と「気がかり」

そもそも「気づき」と「気がかり」との違いは何であろうか。「気づき」とは、「それまで意識がなかったことに思いが及ぶこと」(大辞林 2006)、「気がかり」とは、「いつも心から離れず心配なこと」(同)と説明される。

これらの意味をふまえて、保育現場における文脈にあてはめて、保育士の「気づき」や「気がかり」について考えてみる。

保育士は、親とのかかわりの中で、それまでの親の様子とは異なる状態があれば、それに注意が向く。そのいわゆる“異変”は、保育士が自ら感じ取ったものであり、親から意図的に、目的をもって伝えられたものではない。その「気づき」には、すぐに支援の必要性を感じるものもあるかもしれないが、多くは、すぐに支援を必要とすると感じられるものではないだろう。しかし、その状態が繰り返されたり、何らかの深刻な事情を感じられしたりして、その後の経過が心から離れず、放置しておくことが不適切であると感じられるような場合は、保育士の「気がかり」となる。そして、その後の支援への検討つながるのである。

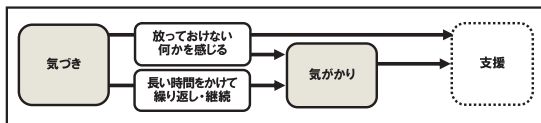


図1 「気づき」・「気がかり」とは(筆者作成)

(2) 先行研究

保育者の「気づき」や「気がかり」に注目した研究は、これまでもいくつか見られるが、その気づきの対象は、子どもの発達上や健康上の問題に焦点を当てたもの(木原 2006など)がほとんどであ

る。また、保育士の「親支援」にかかわる研究では、いわゆる「保育ソーシャルワーク」が分野として確立されつつあるが、それらの分野では、その支援過程や、支援上の課題等を分析、検討したもの(片山 2015、鑑ら 2005、名城 2018など)が主であり、保育現場における具体的な生活の文脈の中で、家庭問題への介入や支援が始まる前の保育士の具体的な「気づき」に着目している研究は少ない。

そもそも保育者は、保育施設等において子どもを直接的に支援することを本来の業務とする、いわゆるケアワーカーである。その保育者の「家庭問題への気づき」に着目することは、保育者にソーシャルワーカーとしての役割の一端を期待することも意味する。保育所にもソーシャルワーカーを設置する必要性は一部で指摘されている(若宮 2012など)が、保育者が保育現場における親との日常的なかわりの中で、どのような「気づき」や「気がかり」を感じているのかの実態については、これまであまり明確にされていない。

実質的には相談支援を主な業務としていないケアワーカーである保育者が、日常的なかわりの中で、親に対して保育者がどのような「気づき」や「気がかり」を感じ、その「気づき」や「気がかり」が、その後の支援にどのように結びついているのだろうか。一人ひとりのケアワーカーが、「気づき」・「気がかり」を得て、それが支援につながられる過程が分析されることで、子どもや親を取り巻く諸問題の解決に向けた取組が広がるのではないだろうか。

III 研究の方法

(1) 調査対象

まず、本研究における調査対象者の選定条件を、保育者としての勤務経験が概ね5年以上である者とした。これは、5年以上の保育者としての実務経験を有することで、何らかの問題を抱える親へ対応の経験を語ることができると考えられたからである。

これらの条件をもとに、X保育所長を通じて調査協力者を募った。その結果、3名の保育士から

協力を得ることができた(表1)。

表1 調査協力者

保育士	性別	保育者としての勤務経験
Aさん	女性	5年目
Bさん	女性	6年目
Cさん	女性	9年目

(2) 調査期間

調査期間は2019年4月～7月である。

(3) 調査方法

本研究は、保育者の保育現場の中での相談場面ではない日常的な親とのかかわりにおける「気づき」・「気がかり」の分析であることから、保育者本人による語りから得られたデータが不可欠であると考え、インタビュー調査を行うこととした。インタビューでは、インタビューガイド(表2)を準備したうえで、事前に調査対象者に渡して内容を把握してもらった。また、語りを妨げずに行えるよう半構造化インタビュー形式で実施した。なお、インタビュー時間はいずれも概ね1時間程度であった。

インタビュー内容は、調査対象者の了解を得てデジタルレコーダーに録音した。インタビューの実施は、3名が勤務するそれぞれの保育所内の一室を借用し、業務に支障が出ないように配慮した上で行った。

表2 インタビューガイド

- ① 保育所に通う子どもの親に対して、その家庭での生活環境の問題にかかわる何らかの気づきや気がかりを感じる可能性があるか。もしあれば、その気づきや気がかりは具体的にどのようなものか。
- ② ①の気づきや気がかりの中で、養育困難を抱えた親(またはその子ども)が、それまでに発信するシグナルはあったか、もしあれば、そのシグナルは具体的にどのようなものであったか。
- ③ ②のシグナルに対して、親(またはその子ども)に対してどのようなアプローチを行ったか。

(4) 分析方法

本研究は、保育者の保育現場における「気づき」・

「気がかり」の分析を目的とした。そのため、語られたデータをそのまま活かす方法が適していると考えた。そこで、佐藤(2008)の「定型的コーディング」の一部を活用して行った。

(5) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、調査協力者に対して、事前の本研究の目的及び方法について、口頭ならびに文書を用いて説明をした上で、書面(同意書)による研究参加の意思確認を行った。加えて、個人情報の保護に努めることについて説明した。なお、本研究の実施にあたっては、事前に山口県立大学生命倫理委員会にて審査・承認を得たうえで実施した(整理番号2019-12号)。

IV 分析結果

(1) 保育士の「気づき」

保育士が、日常の保育活動の中で、親と接点を持つことができるのは、朝と夕刻の送迎時である。朝、保育所に子どもを送り届ける多くの親がその後出勤を控えており、夕刻に子どもを迎えに来た親の多くは、その後帰宅し、多くの家事が控えている。よって、送迎時に親と保育士が接触する時間は、通常はいずれも非常に短く、限られたものであるが、その短い時間に、保育士が親たちの些細な変化を捉えている

それらの「気づき」についての保育士たちの語りを以下に挙げる。

- ① 日によって、「たぶんイライラしているんだろうな」というときは、すごく分かります。子どもにもすごく強いので。でも普通るときは、普通に優しく関わっておられますね。(Aさん)
- ② お仕事とかでお忙しいと、お母さん自身、保護者の方自身も余裕がなくなってくるので、いつもは優しくというか、子どもたちが行きたくないとか、やりたくないとか、いろんなことがあると思うんですけど、それに優しく関わられているお母さんが、すごい子どもたちを怒って、せかして、泣いたまま渡されたりすると、お仕事にやっぱり余裕がないのかな、とか。(Bさん)
- ③ 仕事の服で来られて、「今から、また行くんで

す」っていう感じのときもありますし、本当にお忙しいんだなっていうのを感じるときもありますね、ひしひしと。(Bさん)

④いつもは、ばっちりお化粧とか身支度をされているお母さんが、ちょっと疲れた感じにされていたりすると。お休みの場合も多いんですけど、例えば体調を崩されて、今日は仕事をどうしても休まないといけない(のかな)ということとかは思えますね。(Bさん)

⑤お母さん自身もね、やっぱり。いつもはニコニコしてるのに、今日はちょっと怒っていらっしやるかな、みたいな時とかもあるので、「ああ、何かあったかな」みたいな。(Cさん)

⑥気づくことはあると思います。やっぱり表情。子どもとおうちの方の表情とか、声の掛け方とか。「朝、きっと、おうちで何かあったんだろうな」っていうときは、お母さんも結構、「早くしなさいよ」みたいな感じで言うし、子どもも、ちょっと様子がいつもと違うし。(Cさん)

⑦挨拶だけでもいいので、しっかり目を見てご挨拶をするっていうだけで。もし、余裕があれば、相手の方の、その日の様子とか、表情だとか、雰囲気だとかをもし感じ取れたら「あら？」みたいな感じで、何かあるところがあったら見ておくと、それに繋がって子どもの様子も、「あら？」って気づくときもあるし、子どもが、ぼろって言ったこと。(Cさん)

(2) 保育士の「気がかり」

次に、保育士の「気がかり」に注目する。保育所に毎日概ね同じ時刻に通うこと、そして、子どもが日常生活で必要とする身の回りの物を親が準備することなど、一見整っていることが当たり前のことであっても、時として乱れが生じる場合がある。その変化は些細なものかもしれないが、時間の経過とともに、次第に顕在化・常態化してくるものである。

次に記した保育者の語りは、そうした変化の一端に気づいたものである。

⑧今、なかなか毎日、来れない方がいらっしやあって。今のクラスなんですけど。無断で結構休まれるんですよ。連絡がないことが多くて。本当に連絡がないのが続いたら、こっちから園長が電話を掛けたりとか。昨日久しぶりに、また来たんなんですけど。ずっと1週間ぐらい来てない時期があつて。(Aさん)

⑨一応、「みんな食べているので持ってきてください」とは言っているんですけど、なかなか、それも持ってきてもらえなくて……。1個ずつ言うんですよ。「今度、水筒を持ってきてください」って言ったら……。その次の日は、水筒は持ってくるけど、今度は別の持ち物がなかったりとか。(Aさん)

⑩感じ方は、すごく柔らかい保護者の方だなという印象なんですけど。でも、忘れ物が少し多かったりですとか、生活面でも、例えば子どものほうから、「今朝ご飯を食べてきてない」「今日、おやつだけ食べてきた」とか、そういう話とかも聞くので。(Bさん)

⑪お母さん自身にサポートが必要というか。お仕事をされている方なんですけど、例えば、子どもの着替えを補充……。夏になっても、いつまでも冬物が入ったりとか忘れ物が多い……。水筒の汚れとか、お弁当箱の汚れとかも、今、通ってる女の子のお姉ちゃんが去年来たときに、お弁当の中身を洗わずに、そのまま朝、ご飯を詰められる。(Bさん)

⑫お母さん自身も生活でいっぱいばいばいで、子どもはもちろん、そのお母さんとのふれあいの時間が少ないので、ちょっと週明けに情緒が不安定でしたりとか、特定の保育士に、すごくスキンシップを求めて甘えたりとか、そういう姿が見られませんか。(Bさん)

V 考察

保育士3名からの聞き取りによる語りから、保育現場における保育士の「気づき」・「気がかり」が得られた。

一つは、保育士が親子と直接的に接触する送迎の短い間に感じられている「気づき」である。もう一つは、日中の保育時間内において、子どもの身の回りの物の様子や親や子どもの生活のリズムに乱れが生じた時に感じられている「気がかり」である。

(1) 送迎時等の短時間でいつもと違う親の様子に「気づく」力

平素と比較して、親の様子が違うことへの「気づき」は、④「いつもは、ばっちりお化粧とか身支度をされているお母さんが、ちょっと疲れた感じにされていたりする」(Bさん)、②「優しく関

わられているお母さんが、すごい子どもたちを怒って、せかして、泣いたまま渡されたりすると、お仕事に、やっぱり余裕がないのかな」(Bさん)、⑤「いつもはニコニコしてるのに、今日は、ちょっと怒っていらっしやる・・・『ああ、何かあったのかな』みたいな」(Cさん)など、いわゆる「いつもは〇〇なのに、今日は△△である」といったかたちで表現されるものである。

保育士は、親の「化粧や身支度の様子」「わが子への接し方や態度」「表情やしぐさ」などから、些細な変化を読み取っている。何がこれらの変化をもたらしているのか、といった判断には根拠はなく、その理由や背景をその都度捉えることはできていないが、②「お仕事に、やっぱり余裕がないのかな」(Bさん)、⑤「何かあったかな」(Cさん)のように、保育士なりにその背景は推察されている。保育士がそのように感じたのは、これまでのそれぞれの親とのかかわりでの経験知をふまえつつ、その時の会話の文脈などから導きだした見立てであるように思われる。また、③「仕事の服で来られて、『今から、また行くんです』っていう感じのときもありますし、本当にお忙しいんだなっていうのを感じる時もありますね。ひしひしと」(Bさん)にあるように、仕事着で保育所に来た、ある日の親の様子を見逃していないからこそ、大変そうな親の現実が保育士に伝わることもある。

次のCさんの語りは興味深い。⑦「挨拶だけでもいいので、しっかり目を見てご挨拶をするっていうだけで。もし、余裕があれば、相手の方の、その日の様子とか、表情だとか、雰囲気だとかをもし感じ取れたら『あら?』みたいな感じで、何かあるところがあったら見ておくと、それに繋がって子どもの様子も、『あら?』って気づくときもあるし」(Cさん)では、Cさんが語る「挨拶」が、単なる朝の挨拶ではなく、親の反応を引き出す機能を有していることを示している。保育士は「気づき」を待っているだけではなく、意識的にあるいは無意識に、親からの反応を引き出す策を講じていることが分かる。

(2) 子どもの持ち物や生活リズムの乱調から「気がかり」を感じる力

いずれもAさんの語りであるが、⑧と⑨の2つの語りに着目したい。⑧「無断で結構休まれるんですよ。連絡がないことが多くて・・・昨日久しぶりに、また来たんですけど。ずっと1週間ぐらい来てない時期があって。」の語りから得られている気がかりは、一定期間にわたる「欠席」である。また、⑨「なかなか、それも持ってきてもらえなくて。1個ずつ言うんですよ。『今度、水筒を持ってきてください』って言ったら、その次の日は、水筒は持ってくるけど、今度は別の持ち物がなかったりとか。」の語りから得られている「気がかり」は、「継続する忘れ物」である。

また、⑩「夏になっても、いつまでも冬物が入っていたりとか忘れ物が多い」「お弁当の中身を洗わずに、そのまま朝、ご飯を詰められる」の語りであるが、ここでのBさんの「気がかり」は、きょうだいを通して、複数年にわたるものである。

これらの「気がかり」は、長い期間にわたって見られる変化から導き出されたものであろう。その過程において、小さな「気づき」の蓄積は、「気がかり」を構成している要素であるとも予測される。些細な変化に「気づく」ことに加え、継続的、断続的に「気がかり」を感じていると言える(図2)。

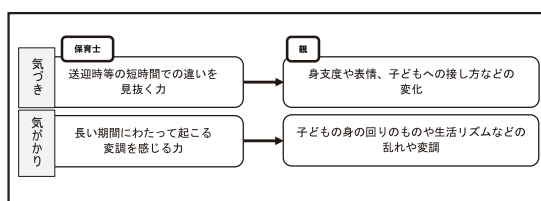


図2 保育士の気づき・気がかりの構造(筆者作成)

(3) 保育者の「気づき」・「気がかり」から親への支援につなげるためには

保育士が何らかの「気づき」や「気がかり」を得た後に、親への支援につなげることができるかどうかは大変重要なことである。

保育士の「気づき」や「気がかり」が、一定の期間にわたって繰り返されることは、言い換えられ

ば、毎日の親たちとの関わりの機会が多く確保されていることを意味している。そのためには、親とかかわる接点として圧倒的に機会が多い朝や夕刻の送迎時に、できるだけ多く親と接触する時間が確保され、親の様子を見ることができることが重要ではないだろうか。

しかし、保育者は、送迎時に親を保育所で待ち構えているわけではない。朝であれば、次々に慌ただしく送り届けられる子どもを保育活動と並行して受け入れ、同時に親の様子にも目を配るのである。夕刻も同様に、子どもたちの保育をしながら、随時来所する親を迎え入れている。また、延長保育も含めると、保育所が子どもを迎え入れている時間は、一人の保育士の勤務時間を超えるため、保育士は出退勤時間をずらしたシフト制を組んでいる。こうした保育所ならではの事情により、保育士が親と接触することが難しい様子も語りの中からうかがえた。「帰りも『話したいのに』っていう時も、他の先生がいらっしゃらないときに、なかなか話せなかったりというときもあります。」(Aさん)、「午前中に来られる先生は、お迎えのときに保護者へお会いできない」(Bさん)は、長時間にわたって保育活動を行う保育所において、保育士の勤務時間のシフト制により、担任保育士が、必ずしも親と顔を合わせることができないという保育所ならではの事情が見られた。

それを補うのが、職場の協力体制である。「職員会議があるので、その中で子どもたちについて気になることを担任同士で話したりする機会もありますし、日常的に『こんなことがあったから、ちょっと聞いてみてくれる?』っていうふう」(Bさん)にあるように、日常的に保育士同士で情報が共有でき、仲間同士で事例検討がし合える環境

にあることが重要であろう。

現在、保育者をとりまく労働環境の厳しさが指摘されている。保育士新規求人倍率が9割以上の都道府県で1倍を超えているほか、早期退職の顕著な傾向が見られること、休暇の確保が困難であるなどの業務の負担感が大きいことなどが報告されている(厚生労働省 2015)。そうした中、保育士は親への支援の必要を感じながらも、具体的にどのように支援をしたら良いのか分からなかったり、普段の保育実践からだけでは、親支援のノウハウの蓄積はままならなかったりするが、学ぶ機会を得ようとしても、代替保育士の確保が困難であることなどの理由により研修に参加できなかったり、職場に人的や時間的な余裕がないために職場内研修が実施できなかったり、といったスキルアップの機会が、保育労働環境の悪化によって奪われている現状がみられる。

こうした現状の中、保育士の「気づき」・「気がかり」について着目することをおして、保育現場における親支援のあり方を問い直すことは、新任保育者のスキルアップ等の保育者教育にも何らかの貢献が期待できると思われる。

また、今回のインタビュー調査の中で、いずれの保育士に、保育所におけるソーシャルワーク機能についての考えを問うたが、いずれの保育士も、保育所ソーシャルワークについては、一定の必要性を感じつつ、その実現については、今後への期待が寄せられた。

VI まとめ

今回、保育士の語りから、日常の保育場面における親に対する「気づき」・「気がかり」の実態の一端を明らかにした。親を対象とした保育士の「気づき」や「気がかり」は、「送迎時等の短時間で親の違いを見抜く力」、「子どもの身の回りの物や生活リズムの乱調に気づく力」で構成されていることが示唆されたと言える。本調査の対象が3名であったことから、事例的な検討にとどまるものであるが、今後は、「気づき」・「気がかり」の構造を明らかにし、それを支援につなげていく過程

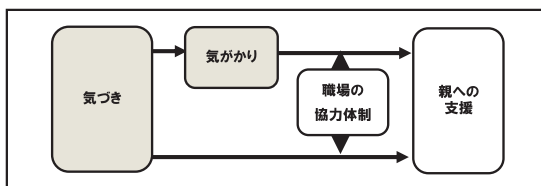


図3 「気づき」・「気がかり」から「支援」への流れ (筆者作成)

を明らかにするためには、保育士が感じた「気づき」・「気がかり」と実際の養育困難性との結びつきなど、さらに多面的で詳細な検証が必要であろう。

最後に、親は、それぞれ様々な社会環境や生活実態があるうえに、支援が必要であるにもかかわらず自ら支援を求めることができていないことが多いという側面が、保育士の「気づき」や「気がかり」を感じている背景にあることにも目を向けてみたい。

親は、生活問題を抱えていても助けを求めることはほとんどない。そうした親たちにどのように支援の手を差し伸べればよいのか、といった問題は、ともすれば児童家庭ソーシャルワークを考える上での永遠の課題であるのかもしれない。

これまでの親支援では、支援の担い手と支援の受け手との間に接点があり、その支援を受け手が受け取ることができるのが前提になっている。しかし、その支援の接点が非常に乏しいのが現状である。家庭問題は地域社会の中で埋もれ、本来支援を必要とする人々は、支援の手の届かないところにいる。よって、日常的な課題を抱える親にとっては、「支援を求める力」すなわち「求援力」を高めていくことが必要である。

保育所における支援において、日頃から支援を拒む母親の自己決定を促す役割を身近な保育士が担い、安心して頼られる存在になる可能性を指摘されている(大原・横山ら 2011)が、今後は、保育士が、求援力の低い親に対しては、「気づき」についての感度を高め、親からの求援を待たずとも、保育士が自ら気づき、支援を開始することで、早期の問題解決につながるような仕組みを構築していくことが求められているものと思われる。

謝辞 本研究の実施にあたり、大変お忙しい中、インタビュー調査にご協力いただきました、三人の保育士の方々に心よりお礼申し上げます。

本研究は2018年山口県立大学研究創作活動(Ⅱ基礎・基盤研究型)「保育現場における生活困難

状況の気づきの構造分析—保育者の「気がかり観」の検討—」による研究成果の一部である。

文献

- 片山美香(2015)「若手保育者による保護者支援の困難さと対応に関する検討—経験に基づく保育者としての成長過程に着目して—」岡山大学大学院教育学研究科教育集録(159) .11-20.
- 厚生労働省(2015)「保育士等に関する関係資料」第3回保育士等確保対策検討会(平成27年12月) .参考資料1.
- 鑑さやか・千葉千恵美(2005)「社会福祉実践における保育士の役割と課題—子育て支援に関する相談援助の内容の多様化から—」東北文化学園大学保健福祉学研究(4) .27-38.
- 木原久美子(2006)「「気になる子」の保育をめぐるコンサルテーションの課題—保育者の問題意識と保育対処の実態をふまえて—」帝京大学文学部教育学科紀要(31) .31-39.
- 名城健二(2018)「メンタルヘルスの課題を抱える母親とその子ども支援および支援機関の連携の現状と課題—沖縄県A市における支援者へのインタビュー調査から—」精神保健福祉(49) .NO2.193-201.
- 大原麻由・横山順一・横山和恵(2011)「多くの問題を抱える家庭への保育所における支援—保育所長へのインタビュー調査を通して—」山梨学院短期大学研究紀要(31) .15-26.
- 佐藤郁哉(2015)「質的データ分析法 原理・方法・実践」初版第9刷.新曜社.
- 若宮邦彦(2012)「保育ソーシャルワークの意義と課題」南九州大学人間発達研究(2) 117-123.
- 横山順一・高木健志(2018)「自助・自己責任時代における新たな支援のあり方を考える—福祉的課題を抱えた人の『支援を求める力・受ける力』の可能性に着目する—」山口県立大学学術情報(11) .87-92.

On the nursery staff in the childcare spot "notice", and "anxious"
- from the talk of the nursery staff -

YOKOYAMA Junichi
TAKAKI Takeshi

Summary

In the modern society, the way of the support for the parent having few that I call for help to others even if I have the issue of life is a very big problem. Meanwhile, in the childcare scene where I am more likely to recognize the difficulty that a parent shows, the examination that "mind is belonging to it", and is enough about "anxiety" until now that a childminder feels for some kind of signals which a parent with some kind of problems shows in everyday life is not done.

In this report, I investigated an interview to three nursery staff for the purpose of clarifying one end of what kind of actual situation whether felt "notice", and "anxiety" in the relation with the daily parent who was not the consultation scene of the nursery staff of the nursery school.

Key word: the nursery staff, notice, anxious,